



10 15 20 25 30 35 40 45



川上行義復雙言新話

島田堂書肆

貳編上

A520
4

かひ
きき
し
水
り
義

あ
ら
う
ち
媛
継
子

新
治



二
角
ん
上
の
巻

48-8333

大鼓の陽にして火子象とる故に舞樂亦火燭大鼓と
 用ゆる例あり人を奮起せしむるを鞞舞と云ふ然ハ神
 勇み大鞞を用ひ陣押にも大鼓を用ひ大鞞が鳴る賑り
 たま真とふを形此冊子の縮荷祭の大鼓雜子に始り火燭に縁あり
 不動の前は局を結ぶ川上のかハハ鉄もて打笛一太鞞の皮不因あり高
 木のきん爰に大鼓のドウとる仇打ち昔ハ大鞞と稱せしが今ハ却イ
 法律の罪人とするものなり千と受るハ理の當然諫鞞代りに世を警め
 ると島鮮堂亦鼓舞されて起泉子が二編を打切る郷音す之只
 トンくと陽氣に求めの程を願ふ

明治十四年二月

芳川春濤



川上行義

再出
川上行義

内藤新宿娼妓
松原おら

大代山村の農
内藤伊兵衛

川上行義



共小唄と云ふ九段の事と
 紀せし祭礼の
 提燈は二張
 備えお
 つれづれ
 て原宅の
 途中は道といふ所にて
 國系亦別とて一人家跡をたして
 急ぐ傍への木葉をうら密とて出づ
 一人の曲者が朋を求むとてありまじき
 声をもうけば後々うら密一刀お切
 さげり流石とあひの身まじき由
 樹をへて小唄と云ふ何奴まじき

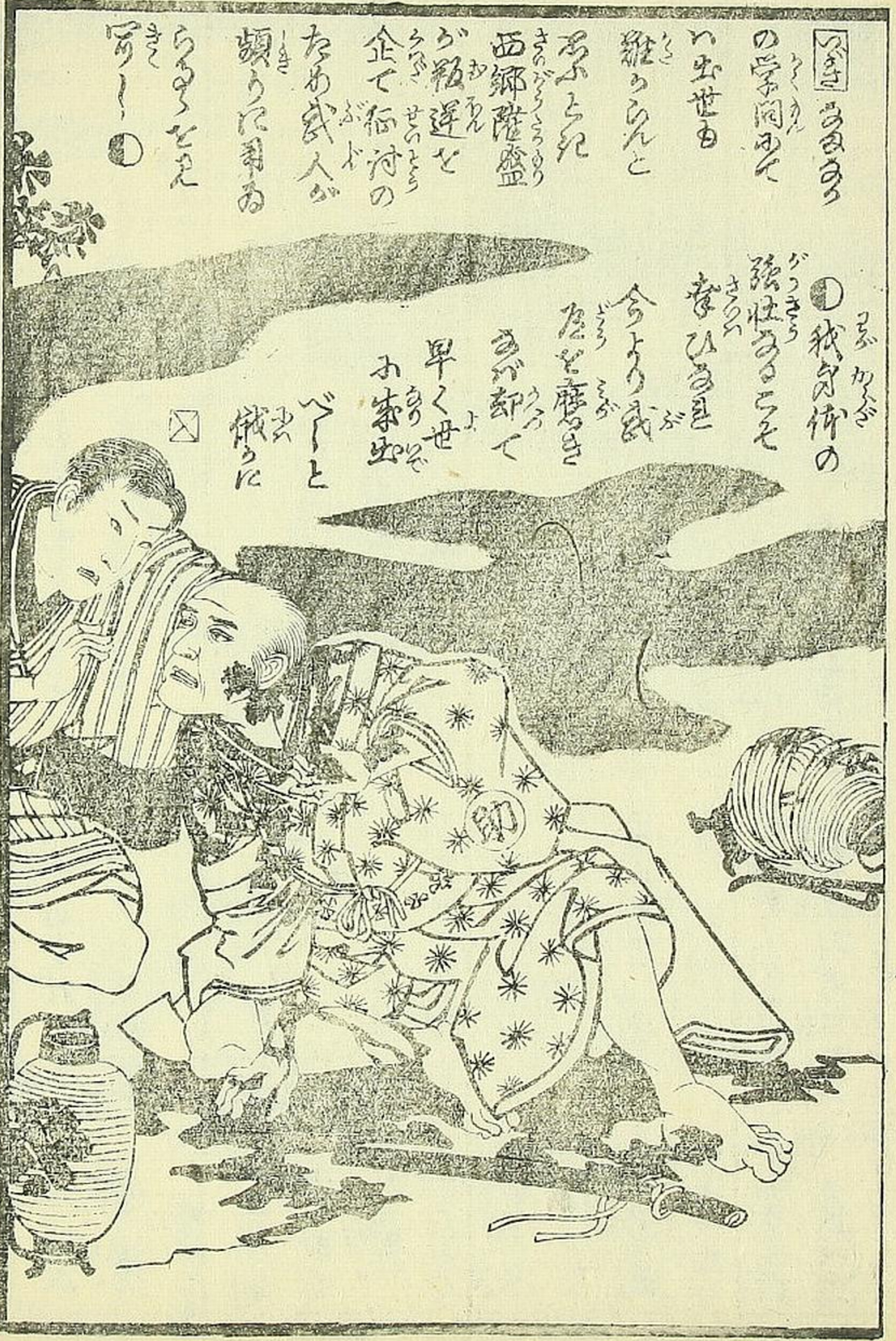
二人の曲者
 後々か
 まて
 提燈を
 一と
 外を
 曲者の
 急ぐ傍
 へに
 木葉の
 急ぐ傍
 への
 木葉を
 うら密
 とて
 出づ
 一人の
 曲者が
 朋を
 求む
 とて
 あり
 まじ
 き
 声も
 うけ
 ば
 後々
 うら
 密一
 刀お
 切
 さげ
 り流
 石と
 あひ
 の身
 まじ
 き由
 樹を
 へて
 小唄
 と云
 ふ何
 奴ま
 じき



一杯の傾けは後々
 とて助を求む國境と

〇〇名乗白
 せすといひ
 せもそくまじき
 又現つ世
 曲者が二き刀
 志す切子イ
 岩めと判ん
 とするお
 自由か
 提燈の火
 小唄と
 何れともまじ

五
 五



西郷隆盛
 か秘運を
 企て福討の
 ため成人が
 頼りにする
 らるるを
 可し

秋分節の
 強はるこそ
 幸ひる也
 今より成
 たるを
 早く世
 小家出
 べと
 俄らに



志
 と朝と
 て故郷
 ある父へお候
 遂に手紙
 人か

合用きたる
 松立を学
 技へ入家
 海食と
 急を
 同く十年の六月
 於て陸軍教導團
 へ入り未だ大敵へ
 編入されい必至と
 勉強せしむる
 羽生年の十一月卒業
 の免状を以て
 精進信を命せられ

010190517956

芳川春騰閣本起泉

川上行義復警奇談 二編	幻阿竹尊開書 二編	澤村田之助曙草紙 五編	坂東彦三倭一流 三編	白菅阿繁顛末 三編	嶋田一郎梅雨日記 五編	此名も高橋 毒婦之附傳
出版人 關島龍吉	編輯人 岡本勘造	新板物不致消心	府藤栗毛 三編	御所櫻梅松録 十編	東京奇聞 七編	色吉原味具糸符符 冊 五







10

15

20

25

30

A520
J



川のふゆきり

雪解氷

あざむき

せん

二層ん

中の
中丸

中の巻のき 虫状と燃かかすの治十二年

四月廿二日の午後八時ごろ

國元なる并登長の方

兼中を届き電信の

幸なりと胸まが重く

と押さる

封切

とほと

懐きやすに 假名文字のサヤ

チ。ガクニキラレ。イノチ。アマウシ。

スガカレ。とわ懐きけま。一粒ま

ゆくと意い分分。が仔細さきひ。起つ帯の

△音で

あつと片花

慈涙不咽ふと

人こ同慰めて

かどのけ今四

招校育も運出小成

中ちもきえま。いんき

の田の虫動と信ら依城の

るを乞ふ。揮眉されよと

共助けて教おるを徳先

心ま。解念せら。のいひ後か

海不小人。と。中。と。られ

二二

<48-9334>



返らぬるにうらん
 馬の上の汗畧
 を以て情木
 小田秋

冬春の季節
 思ふ
 思ふ
 思ふ

明治十二年四月廿日死享年六十五歳
 俗名 川上助左門

次



幸若と云ふは久河海軍
 さへあるお父の教と思へば若か
 今眼帯にありては征伐と
 得ざれば対つては口惜ま
 とあひついで藤の間を意は
 写身者が交通を彩られたれど
 毎由政の格子のからぬと
 のとを一年たれば
 過せぬ節りに
 りと等雨で
 故の舟に意
 てもあはれ悔て
 小田秋

父の為か假
 七月十八日
 の夜密
 小田秋
 徳豊と



厭いさせねど
 まるゝ病を
 直らぬと嘆む
 縮むの郵便と
 なるものけり
 親が病を
 不自由で
 らんお例ふ
 へ看かくて
 とあへど
 怪あふ
 悪く候
 らお病
 決へ



松安学校
 母さんか
 大の薬の
 代り
 心
 卑い
 親の

川上三郎

五

芳川春濤閣 本起泉綴

川上行義復警奇談 二編	幻阿竹導開書 三編	澤村田之助曙草紙 五編	坂東彦三倭一流 三編	白菅阿繁顛末 三編	嶋田一郎梅雨日記 五編	其名も高橋 毒婦之阿傳 東京奇聞 七編
出版人 綱島龜吉	編輯人 岡本勘造	新板物不致淨心	新板物不致淨心	御所櫻梅松録 三編	東京上関 横濱上兼花岡奇縁譚 三編	色吉原味茶茶結縁 三編

芳川春濤閣 岡本起泉綴



芳川春濤閣
 岡本起泉綴
 其名も高橋
 毒婦之阿傳
 東京奇聞 七編
 色吉原味茶茶結縁 三編

揚洲周延畫

揚洲周延畫
 下巻





10

15

20

25

30



罪の如くおび
 早蓮江百人へ通
 一由早く
 全第にて
 一雨にあうん
 先交まふ
 今令と成を百の
 夏後せよと上十路田
 の金糸と後へ何れを因

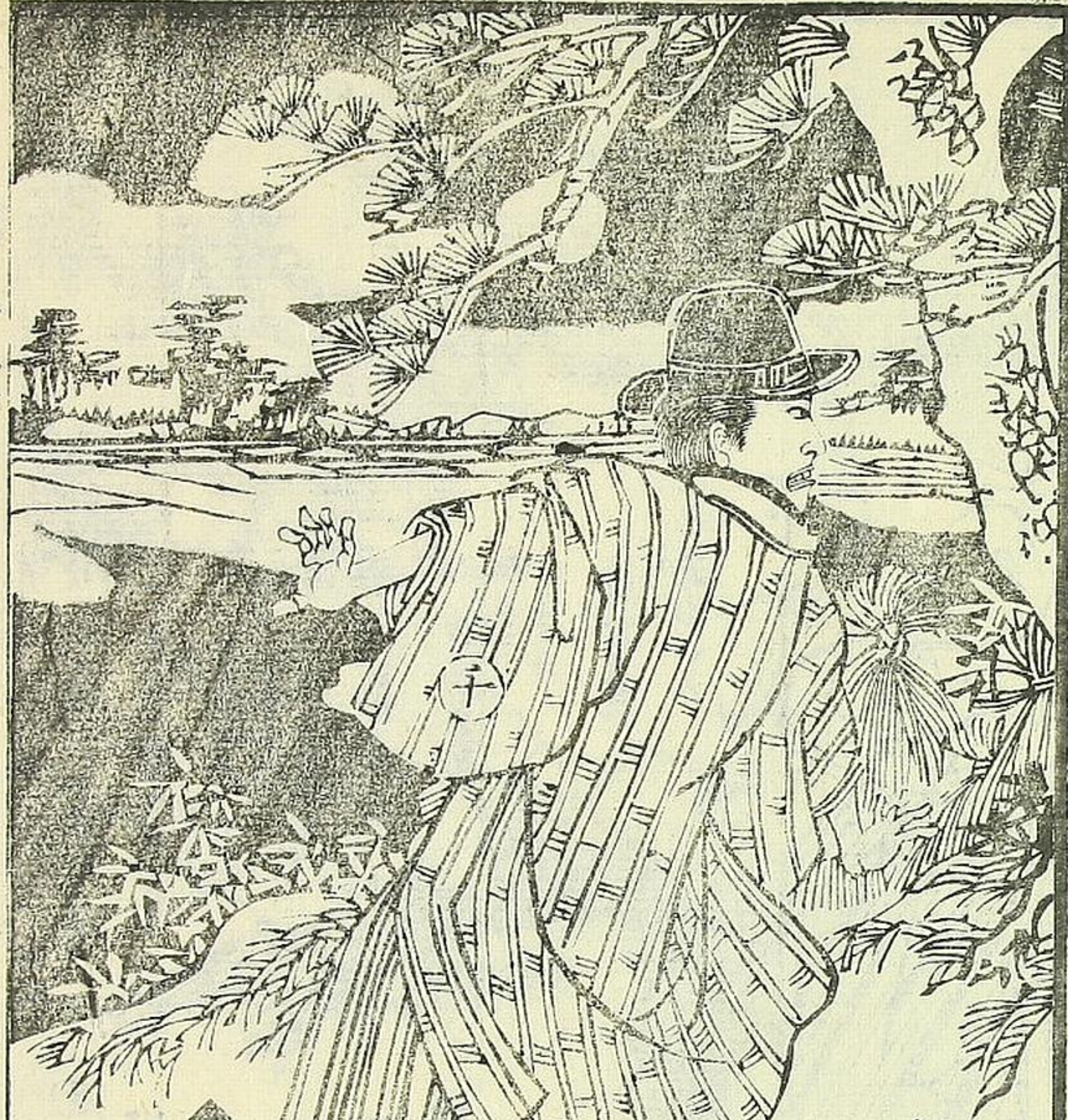
送るおれ歌々
 今第のためとあるに
 いたくとおびあが
 小押へ
 送るおれ歌々
 今第のためとあるに
 いたくとおびあが
 小押へ



五へ不審
 されと面削
 多ると身後の
 候とあつし前
 借金等の疑
 什と尋ねると
 お金ハ失ホ由

送るおれ歌々
 今第のためとあるに
 いたくとおびあが
 小押へ

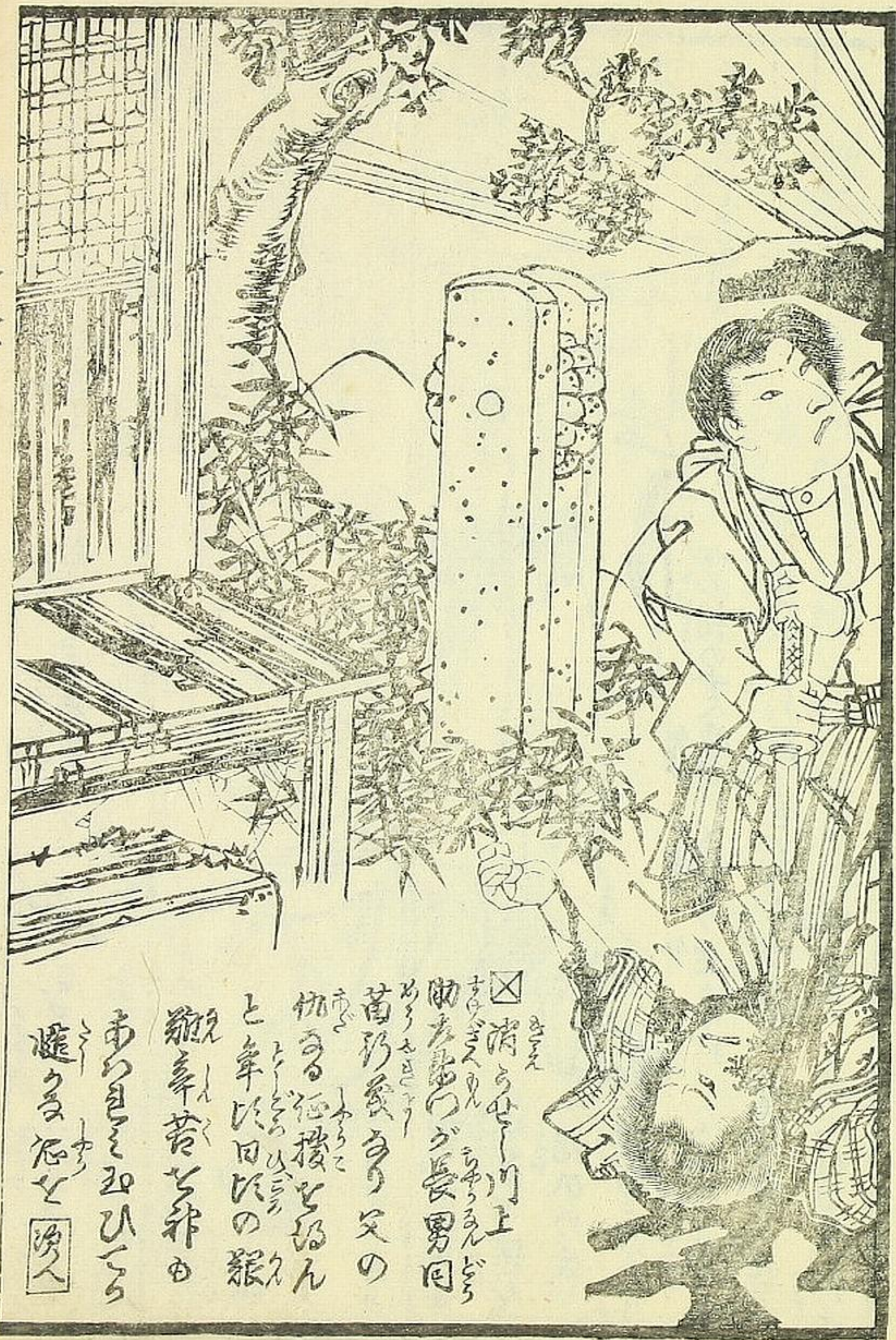
送るおれ歌々
 今第のためとあるに
 いたくとおびあが
 小押へ



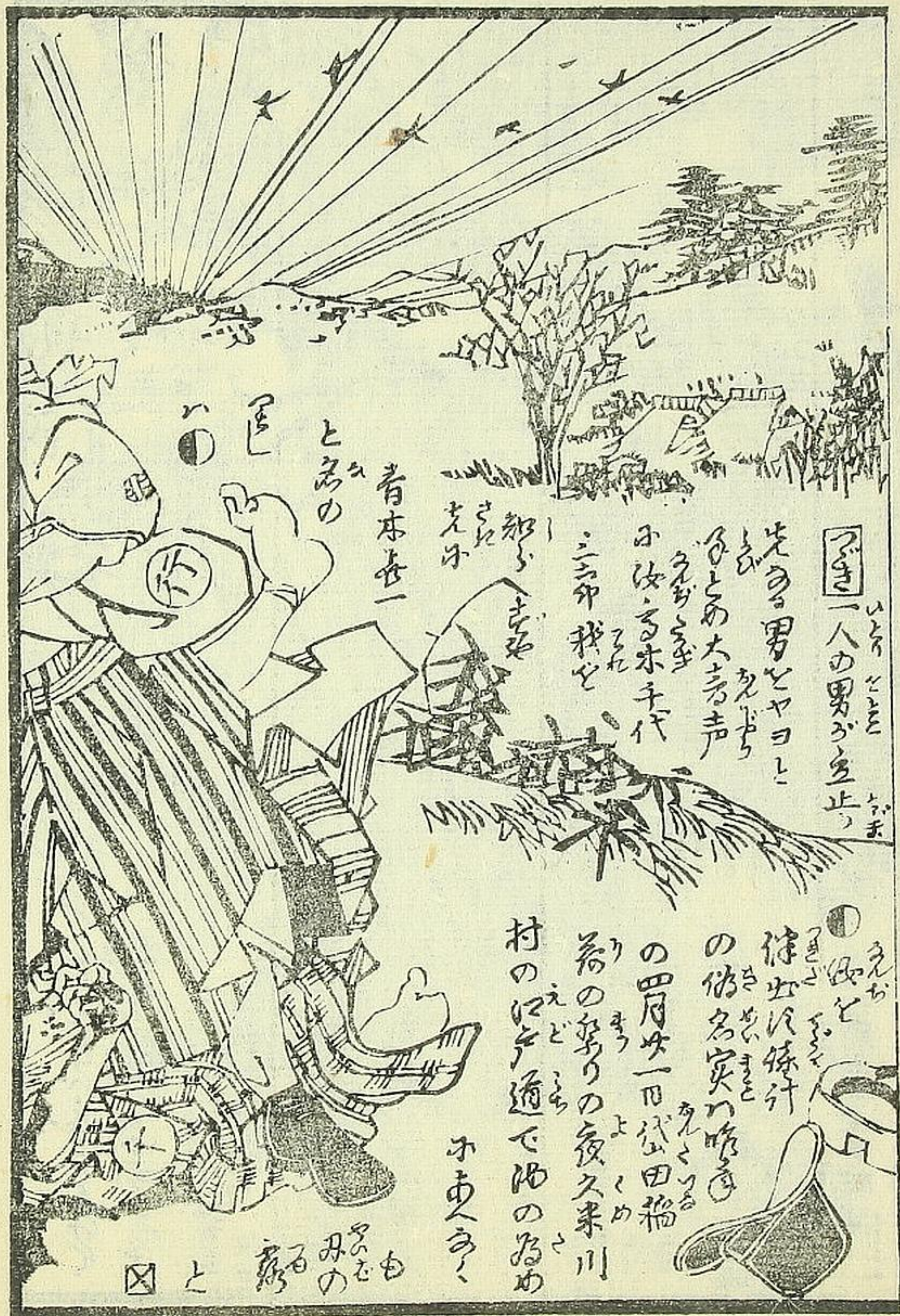
五
 細を横に
 名を末門
 村へ折んとする所
 茶室
 由眠
 新
 甲の二人
 遠寺の鐘も日付どつが
 どの道も後もあけり
 免りも



四
 表へおびき
 三市と字
 校うら首尾
 那秋津村多る
 後ハ武州ハ多藤子
 小町や水車おの白さ
 代よ子
 ち



清らむ川上
 助左衛門が長男同
 苗形をとり父の
 仇を征伐せ給ん
 と年以日以の報
 難奉答を非由
 赤の目と玉ひら
 瀬うき怨を



一人の男が立止り
 先きの男をヤヨト
 多とあ大なる声
 小汝を木手代
 三卯我を
 知るまき
 老の
 青木香一
 と名の

如と
 伴出は縁計
 の偽名実の喧嘩
 の四月廿一日公田稻
 翁のありの夜久米川
 村の江戸通で池のぬめ
 小あふり

母の
 石の
 と

川
五

010190517972

芳川春壽 國本起作

幻阿竹噺開書三編
 川上行義復讎新話二編
 澤村田之助噺草紙五編
 坂東彦三倭一流三編
 白菅阿繁顛末三編
 島田一郎梅雨日記五編
 其名高橋毒婦小傳七編

御所櫻梅松録十五編
 名所東京新圖
 武者切附本品々
 新形折本品々
 石榴略曆品々
 編者 國本起
 作者 國本起
 校主 綱島龜吉



御所 浅野町十二番地
 明治十年一月六日
 出板人綱島龜吉

